九条はらまち

「はらまち九条の会」会報 **No.357**

2021(令和3)年4月15日(木)発行

■ **はらまち九条の会** は、戦争放棄の憲法9条を守り、永久に「戦争をしない国・日本」であることを願って活動する自由な市民の会です。支持政党や宗教を問わず、何の拘束もなく、匿名でも入会できる気軽な会です。

■結成は2005年12月ですから、今年で16年目。■会員は南相馬市原町区を中心に391名。年会費は千円です。

◀会のシール(デザイン：朝倉悠三さん)

●新型コロナ感染防止のため 総会は今年も開催中止に

○5月3日憲法記念日"護憲チラシ"の全市新聞折り込みは実施

これは、本会の憲法記念日恒例の活動で、今年で9年目を数えます。全市全新聞に折り込みますが、広く市民の皆さんに見ていただきたい"護憲チラシ"です。

○市成人式は1月から5月2日に変更されていましたが、さらに11月23日に再延期となりました。そのため本会の成人式の"憲法チラシ"の手配りも延期です。事務局会では「コロナ禍の中、お互いに罹患したら大変です。無理せずに注意しながら活動しよう」と話し合っています。皆さんもご自愛ください。

声を出しましょう！市民の署名や反対運動の成果です！

環境省が断念≪常磐道4車線化の汚染土使用≫

環境省は、小高区羽倉はのくら地区の常磐道4車線化、盛り土として原発事故の除染・汚染土を利用しようと計画しましたが、この程、住民の猛反対で断念に至りました。市民一丸となり、私たち「はらまち九条の会」も署名活動などを行った反対運動の成果です。ご協力ありがとうございました。

東日本大震災から10年⑤ "汚染水の海洋放出"

原発事故被害の福島県民を愚弄する さらなるひどい仕打ち

これ以上、海を汚してはなりませぬ！！ 2013.8.25

▲朝倉悠三さんの『福島民報』「震災絵日記」2013年8月25日の作品

菅義偉政権は4月13日、漁民はじめ県民の猛反対を無視しやはり汚染水の海洋投棄を決定しました。これが「震災10年」の菅政権から福島県民へのプレゼントなのか。「復興五輪」は口先だけです。

海洋放出は一時的でなく、30年以上も続くということです。国に忖度して県民の声を伝えない内堀雅雄県知事ですが、みなさんはどう思いますか。

「人間に放射能を無害化する力はない。自然にもその力はない。自然に浄化作用がないものを環境に捨てるのは間違っている」小出裕章

No.357

東日本大震災から10年⑥ 震災・原発事故後10年の原町の“詩”

北緯三七度四〇分東経一四一度

若松 丈太郎

錆びたシャッターを閉じた店先に
おばちゃんがしゃがみこんでいる
駅通りとT字交差する旧国道通りとは
わたしが暮らしている町の中心商店街だ
ときおり車が通り過ぎて行くものの
歩いている人を目にすることはほとんどない
いや歩いている人はいないというべきだ
シャッターを開けることのない店がならんでる
店先にいつもしゃがみこんでいるおばちゃん
話し相手がほしいらしい
とり壊した店の跡地のひび割れたコンクリート
その割れ目に雑草が生え
花を咲かせ
そして枯れても
除草する人はだれもいない
五〇台ほどを置ける商店会駐車場なのに
たいがいは関係者の数台が駐車しているだけ
近所でこどもたちの姿を見ることがない
暗くなってもあかりが灯らない家がおおい

二十歳なかばの一九六〇年ごろから六〇年間ほど
わたしが暮らしている町
東京電力福島第一核発電所から北二五キロほど
原町市・小高町・鹿島町の一市二町が合併して
二〇〇六年に南相馬市となった
合併当時の人口は七万数千人ほどだったものの
二〇二〇年秋の人口は六万人を割っている
十五年で二〇パーセントほどの減少だ
最大人口は八万人ほどだったものの
一九九〇年ごろからは人口が減少しつづけた
ことに二〇一一年には五千人ほどが転出した
年ごとに高齢者層の人口比率が増加している
二〇一一年三月に測定された放射線量
風向きがさいわいして
福島市や郡山市よりも低かったけれど
避難指示区域に指定はされなかったけれど
多くの人びとは避難した
その多くの人びとは戻ることはなかった
近所の魚屋は廃業し転居した
近所の蕎麦屋は病気になって廃業した
近所の飲み屋の女将は死んだ
トナリグミという組織があって
行政からの通知などが伝えられる

トナリグミといってもつきあいがない
その戸数がしだいに減っていまは三軒
居住者がひとりの家とふたりの家と
もう一軒の住人はどこからかときどき帰ってくる
ある日自転車ではじめての通りを通った
空き地があって遊具が置かれて
子どもたちが喊声をあげて走り回っている
子どもたちはいないのがあたりまえ
そう思いこんでいたのに
なぜかほっとした
なぜか嬉しくなった
それからというもの
子どもたちの姿を見たくなって
ときおり自転車のペダルを踏む
しゃがみこんでるおばちゃんの姿に
自分の姿がかさなって見える

（『いのちの籠』第74号 2021年2月発行より）

▲無線塔があった頃の“原町”（写真：洲崎竹次郎氏）